



福井県立
若狭東高校

自己肯定感の涵養

心の内を引き出す 「書かせる指導」で 生徒の自信を高める

設立
1920(大正9)年
形態
全日制／普通科・産業技術科・生活科学科・電子機械科・電気科／共学
生徒数
1学年約190人
09年度入試合格実績
国公立大は、福井大、福井県立大に4人が合格。私立大は、中央大、東京農業大、和光大、金沢工業大、金城大、仁愛大、名古屋商科大、大同工業大、岐阜経済大、京都産業大、大阪学院大、大阪国際大、大阪商業大、関西大などに延べ27人が合格。
住所
〒917-0293 福井県小浜市金屋48-2
電話
0770-56-0400
Web Site
http://www.wakasihigashi-h.ed.jp/

変革のステップ

<p>背景</p> <p>◎普通科の生徒の自己肯定感が薄く、進学実績の低迷などにより保護者の学校に対する信頼度が低下していた</p> <p>STEP 1</p>	<p>実践</p> <p>◎生徒と担任の交換ノート、週末課題、小論文講座など、生徒の思いを書かせる機会を数多く設ける</p> <p>STEP 2</p>	<p>成果</p> <p>◎生徒の自己肯定感や学校への帰属意識が高まり、大学進学率と就職率も向上する</p> <p>STEP 3</p>
---	---	---

「どうせ自分には出来ない……」
劣等感にとらわれる生徒たち

2006年4月、福井県立若狭東高校の入学式。この年に県内の進学校から同校に赴任した中森一郎先生は、入学式後、担任を受け持つ普通科クラスの教室に行つて驚いた。

「同じ高校生なのに顔付きが違う……」

高校の入学式は、十代で最も希望に満ちた日の一つのはずだ。ところが、生徒の目には、期待や晴れやかさがあまり見てとれなかった。

同校は普通科、農業系学科、工業系学科を擁する総合高校だ。地元小浜市で普通科のある公立高校は同校と福井県立若狭高校の2校で、普通科を目指す生徒の成績中上位層は若狭高校へ、下位層は同校へ進学するという流れが出来ていた。高校入試の合格発表の場で教師が「おめでとう」と声を掛けても、あまりうれしそうではない生徒もいた。保護者の学校に対する信頼感は厚いとは言えず、入学式や懇談会などの場で「進学実績があまり良くないのですね」と言われることもあった。

中森先生は、自校の状況を次のように話す。

「生徒の多くは『どうせ自分には出来ない』という思いにとらわれ、授業態度は受け身になりがちで、自ら考えようとしませんでした。コミュニケーション力に乏しいために友人関係を築けず、トラブルが起きても自分で

修復出来ません。教師の姿勢も、生徒のそうした傾向に拍車をかけていたように思います。教師一人ひとり努力していたのですが、生徒にどのような力を付けたいのか、教師間での共通認識がないため、進路指導のビジョンが描けない状態でした」

ノートによる一対一の対話が 生徒の心を開かせる

こうした課題を受け、普通科の改革に着手し



福井県立若狭東高校
中森 一郎 Nakamori Ichiro

教職歴25年。同校に赴任して4年目。進学指導室長。「一人ひとりの生徒の中ですべての答えがある」



福井県立若狭東高校
森 早苗 Mori Sanae

教職歴29年。同校に赴任して6年目。普通科長。「どんな一歩も無駄にはならない。可能性を信じて生徒と共に歩んでいきたい」



福井県立若狭東高校
東山裕紀 Higashiyama Hiroki

教職歴11年。同校に赴任して10年目。進学指導室3学年担当。「当たり前前行動を恥ずかしがらずに実践できる生徒を育てたい」



福井県立若狭東高校
松村愛子 Matsumura Aiko

教職歴3年。同校に赴任して1年目。教務部。「何事も枠にとらわれず、広い視野を持ちたい」

たのは07年度のこと。「生徒の自己肯定感を高めること」を最大の目的とし、その指導の中心に据えたのは「書かせる」ことだった。

「生徒が自ら発信する機会を多く設け、主体的に考える習慣を身に付けさせることを狙いました。また、何度も書くうちに、自分を表現する喜びを知り、自信が付くのではないかとという期待もありました」(中森先生)

書かせる指導の主軸は、「エピソードノート」だ。1人1冊のノートを用意し、生徒が学校行事や講演会など、折に触れて感想や思いを書いて提出し、担任がコメントを書いて返すというもの。書かせる機会や提出の頻度などの運用方法は、担任の裁量とした。体育祭や文化祭などの学校行事以外にも、「服装検査についてどう思うか」「掃除をさばることについてどう考えるか」といった、高校生活に関する意見を求める教師もいる。毎日の生活を振り返る機会を多く設けることによつて、自ら考え行動する習慣を付けてほしいという狙いもある。

教師と一対一でつながる「エピソードノート」の存在は、生徒の精神面の安定にもつながっている。普通科長の森早苗先生は次のように話す。「本校の生徒は他人から認められた経験が少なく、『先生に構ってほしい』『先生を独占したい』という思いが強いようです。教師が愛情を注げば注ぐほど、生徒はそれに応えようと、教師が手をかけた分だけ伸びていく

のです」

普段はほとんど話さない生徒が「エピソードノート」では雄弁であったり、心を閉ざしていた生徒がノートの提出を繰り返すうちに思いを明かすようになったりすることもある。一対一の濃密なコミュニケーションが生徒と教師の距離を縮め、担任に対する信頼感を醸成しているのである。

教師の個性が反映された週末課題で 生徒の思いを引き出す

週末課題も「書く」ことを中心にしている。新聞記事を課題文として、読み取りや要約、感想などを100〜200字で書かせる。週の初めの国語の授業で、答え合わせをしたり、生徒同士に相互評価をさせたりしている。

これは07年度1学年の教師3人が始めた取り組みだったが、08年度からは普通科の教師全員で年1回の持ち回りとし、課題プリントの作成を担当することにした。課題文の選定や作題は、担当者任せられている。例えば、体育科教師はオリンピックの記事を選び、英語科教師が選ぶ課題文は英語となるなど、教科の専門性や教師の個性が反映されたプリントが多く、生徒は意欲的に取り組むという。

中には自分の思いをうまく文章に出来ない生徒もいるが、決して自分の意見がないわけでは

ない。生徒の思いをいかに引き出して書かせるかは、教師の指導力にかかっている。国語科の松村愛子先生は次のように述べる。

「自分の意見や思いはあるものの、どのように表現すればよいのか分からない、人目を気にして『それらしいことを書かなければならない』という思い込みにとらわれて書けない、ということもあります。そうした生徒には、生徒に問い掛け、思いをうまく引き出し、生徒に質問をして出てくる単語をつなげて、教師がある程度の文章にしてから、その続きを書かせたりしています。『筆者の意見と違っていてもよいから、自由に書いてごらん』とアドバイスもします。『何を書いてもよい』と分かれば、生徒は自分の思いを生き生きと表現するようになります」

書かせるポイント 「強制」「書き方指導」「評価」

書く指導には「強制」「書き方指導」「評価」の3点が欠かせないと、中森先生は言う。

「まず生徒が書かないと指導が始まらないので、『強制』しても書かせます。強制するためには、生徒の興味を引くような題材を選び、その上でどのように書けばよいのか、『書き方』の提示が必要です。更に、書いた

ものをプラスに『評価』して、生徒自身に『自分は書ける』という自信を与える。この三つをきちんと続けることによって、本校の生徒でも長文が書けるようになりました」

他校と合同の小論文講座で 自信を深めた生徒たち

この指導法は、09年8月、同校で開かれた、他校との合同開催による小論文講座でも実践された。

福井県では、数年前から学力向上事業の一環として、県下一斉での小論文講座を実施している。08年度までは大手予備校の講師を招いて開いていたが、09年度からブロックごとの開催となった。

若狭ブロックでは、同校が企画・運営を担当することになった。だが、この年から県の予算がほとんど付かなくなり、外部講師の招聘はなくなった。ただし、予算があったとしても、以前から課題はあった。生徒の実態を知らない外部講師による講義では、生徒に合った指導が出来ていなかったのだ。

そこで、これらの課題の解決を図ろうと、これまでの経験を生かし、外部講師に頼らず、同校の教師が講師を務める小論文講座を行うことにした。09年5月に同校の教師12人による「チ

ームイースト（若狭東高校小論文指導チーム）」を発足させ、8月までに計画を練り上げたのである。

講座は、生徒の希望進路に対応して、「人文・教育系」「医療・保健系」「社会科学・学際系」「自然科学系」「家政・生活科学系」の5分野を設定した。1分野1〜3人が担当となり、7月から教材研究を開始。レジュメは何度も修正し、前日には模擬授業を行うなど、準備は入念に行った。

当日は、同校以外に、敦賀^{つるが}高校、美^み方^{かた}高校、若狭高校から計157人の生徒が参加。60分間で小論文を書かせた後、90分間の講義を行い、これに基づいて60分でリライトさせるという流れで進めた。完成した小論文は、生徒同士で読み合い、相互評価を行った。

他校生との交流は、同校の生徒に大きな自信を与えたようだ。進学指導室3学年担当の東山裕紀先生は次のように述べる。

「他校生の小論文を読んで、自分の文章は他校の生徒と比べても遜色ないと感じた生徒が多かったようです。中学時代に教科の成績が悪く『自分には出来ない』と劣等感を抱き続けてきた生徒が、自分は他校生と同等以上の文章を書ける、考える力があると、自信を深められたのです」

教師手作りの講座は、当の教師にとっても絶好の学びの場となった。

「授業のシナリオを描いたり、生徒の反応を想定してのシミュレーションをしたりと、万全の準備をしましたが、前日は緊張でなかなか眠れませんでした。他校生も迎えた講座が成功したのは、教師が皆で『チーム』となつて支え合っていたからだと思います。互いに高め合い、支え合いながら準備に没頭した1か月は、私にとっても密度の濃い学びの時間になりました」(森先生)

「何度も指導案を練り直して当日に臨んだため、レジユメには自信がありました。ただ、課題文に対する自分なりの理解が深められなかったこと、時間内に小論文を完成させた生徒が少なかったこともあり、改めて自分の教材研究の未熟さを痛感しました」(東山先生)

こうした反省を踏まえ、次年度は更なる改善を図って開催する予定だ。

校務分掌が連携し「心をつなぐ指導」を目指す

09年4月から、同校の指導は新たな段階に入っている。かねてからの課題である、生徒のコミュニケーション力を

クラス経営計画

若狭東高校の普通科では、07年度の改革開始以来、教師の指導力向上にも努めている。その1つが「クラス経営計画」。クラスの目標、生徒と教師が守る約束、学校行事への取り組み方などの指導方針を明示した計画書である。計画的なクラス経営を行うため、担任が年度当初に作成する。書式は自由。学級目標、学習指導、進路指導、生徒指導など場面ごとに目標を明示する教師もいれば、「目指す生徒像」を示した上で年間指導の流れを詳細に記す教師もいる。

小・中学校ではクラス運営の年間計画を立てるのは一般的だが、高校ではそれほど多くはない。「生徒に『目標に向けて努力しよう』と言うのと同じように、担任も年間を見通したクラス経営の視点を持つことが大切です」と東山先生。年度の最初のLHRで生徒に「クラス経営計画」を配布し、年度終了時に達成度を採点させる教師もいる。あらかじめ目標やその方策を掲げることで、クラス経営に向けた決意を新たにすると共に、生徒の担任に対する信頼感を高めたいという狙いもある。



高めるための取り組みを、3年計画で始動した。その名も「HEART TO HEART」。これまでの「書かせる指導」の強化はもちろん、中学生対象のオープンキャンパスの場で3年生に語らせたり、授業で討論やプレゼンテーションの機会を積極的に設けたりと、進学指導室や教科などの校務分掌が連携して、教育活動のあらゆる場面で生徒が発信する活動を取り入れる。

改革開始から3年。大学進学率は国公立大共に向上、上場企業への就職者も増えた。だが、それ以上の大きな変化は生徒の表情に表れている。

「生徒が毎日、元気に学校に来て、その表情が明るくなっているのが、何よりうれしいですね。学校を好きな生徒が増えていっていると感じます。かつて感じていたような居心地の悪さ、肩身の狭さのようなものがなくなったのではないのでしょうか。より多くの生徒が『若狭東高校に来て良かった』と思って卒業出来るように、教師一丸となって指導に当たっていきたいと思います」

自信に満ちた生徒の笑顔こそが、教師たちを奮い立たせる原動力になるのだ。

今回のテーマに関連する過去の記事はBenesse教育研究開発センターのウェブサイトでご覧いただけます。

2007年2月号特集学校事例「兵庫県立姫路飾西高校」など

▶▶▶ <http://benesse.jp/berd/> → HOME > 情報誌ライブラリ(高校向け)